

地域自然回復のために

NPO 法人 森林再生支援センターニュース

特定非営利活動法人 森林再生支援センター 理事長 村田 源
〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5
TEL 075-432-0026 FAX 075-432-0026
URL: <http://www.crrn.net> E-mail: info@crrn.net

世界遺産をシカが喰う

森林再生支援センター専門委員
湯本貴和 (総合地球環境学研究所)

日本の森がおかしい

「日本の森に大きな変化が起こっている。」
このことに山村に住む人々や生物の研究者の
多くが気づいてから、そろそろ 15 年ほどにな
るでしょうか。西日本ではモウソウチクがどん
どん雑木林に侵入してきます。全国的にはシカ、
イノシシ、サルが植木の苗木や畑の作物を食い
荒らしたり、果樹園の果物を台無しにしたりし
ます。かつてはこのような野生動物は人里離れ
た奥山に住むもので、めったに人の眼に触れる
ものではありませんでした。このような自然の
変化は、当初は一部地域の特異な現象として取
り上げられてきましたが、次第に日本全国どこ
にでも起こっている同時多発的な様相を呈し
てきました。

オーバーユースとアンダーユースの両輪

環境省は、生物多様性に関して日本の自然が
抱える諸問題は、第 1 の危機「開発や乱獲によ
る生物種の絶滅や脆弱な生態系への悪影響」、
第 2 の危機「農山村での人間活動の縮小と生活
スタイルの変化に伴う耕作放棄地の拡大や里

山生態系の崩壊」、第 3 の危機「移入種による
在来生態系の変容」に要約されるとしています。
これまで自然保護といえば、国立公園や天然記
念物に指定することによって、守るべき自然を
囲い込んで人間の手になるべく加わらないよ
うに利用を制限するという、第 1 の危機に対
してゾーニングと利用制限という対策を施し
てきました。これに加えて第 3 の危機に対しては、
移入種の駆除という対策をまず適用すべきで
しょう。けれども第 2 の危機はこのような地域
限定の囲い込み型の対策では解決できません。
自然環境の理解に加えて、人間と自然の日常
的な関わりの文化的・歴史的背景について理
解を深めた上で、21 世紀にはこれまでと異な
った人間社会の自然への関わりを提案するこ
とが求められているからです。

19 世紀の後半から 20 世紀にかけて、いわ
ゆる近代化と、それに引き続くグローバル化
に伴って、それぞれの地域を基本的な経済単
位としてきた伝統社会が壊され、地域の外に
ある資源に大幅に依存する現代社会へと急速
に移行してきました。その一里塚としては 1960
年代の

燃料革命があり、私たちの毎日の炊事やお風呂沸かしに使うエネルギー源が「外」からやってくるようになりました。さらにその動きを加速したのが1985年のプラザ合意です。当時、ドル高にあえいでいたアメリカに協調して、先進5カ国（アメリカ、イギリス、フランス、西ドイツ、日本）がドル安になるように積極的に為替レートに介入することを合意しました。その結果、急速な円高に進み、世界中の商品が国内では相対的に安くなって、大量に日本に流れ込んできたわけです。その後、日本はバブル経済に突入していきました。

いまや私たちの日常生活は、輸入される石油製品や食料なしでは考えられなくなっています。大量生産で安くつくられた工業製品や農林産物が世界中のどこにでも流通する一方で、逆にこれまで使われてきた地域の産物が顧みられなくなりました。燃料としての薪や柴、建材や身近な道具素材としての木材や竹、それに食料としての山菜や野生動物の肉を含む農林産物。ブランド化に成功して全国的に流通するごく一部の産物を除いて、これまでの私たちの生活を支えてきた身近な自然資源は安価な代替品によって利用価値が下がり、交換価値はなきに等しいものになってしまいました。そのため、もともと優良なタケノコを採取するために植えられたはずのモウソウチクが邪魔者あつかいされるにまで至ったのです。開発途上国で起こっている資源を巡る環境問題の多くは、自然の生産力や回復力を上回る量を収奪するオーバーユース（過剰利用）であるのに対して、現代日本を含む先進諸国で起こりはじめている第2の危機は、むしろこれまで資源として使ってきたものを放棄して顧みないというアンダーユース（利用不足）による現象です。

このような里山の変化と同時に、奥山では1960年代から国策レベルで始まる広葉樹の皆伐と針葉樹の植林、あるいは観光ブームによる奥山への入り込み数の増加とそれに伴う施設整備という動きも並行しました。ここでは、自然生態系の徹底的なオーバーユースの問題があります。

里山の多くが民有林であったのに対して、奥

山は共有林や藩有林であったために明治の地租改正で国有林とされました。その後、第二次世界大戦の前後での木材需要に応えるための乱伐や、1960年代の紙需用の増大と林野庁・現業職員の安定雇用確保を背景にしたチェーンソーや動力集材機を駆使する皆伐とスギ・ヒノキの一斉造林で、奥山の自然生態系は壊滅的な打撃を蒙りました。もはや野生動物を収容することのできないほどの規模に達した人工林化と、自然を良好に維持できるレベルを超えた奥山への過剰なアクセス整備や野生動物の餌付けなど、日本の自然生態系をどのように維持していくかという見通しのないまま、さまざまな事業が行われ続けたことは否定できません。国立公園化などによる保護区の囲い込みにしても、奥山の伐採あるいは伐採計画がかなり進行するなかでの政治決着としておこなわれてきたために、囲い込むべき保護区は数も少なく、それぞれが野生生物の保全にとって十分とはいえない狭いものになりました。保護区と保護区をつなぐコリドー（回廊）の考え方が環境省や林野庁、国土交通省の政策に現れたのは、ごく最近です。これが第1の危機を生んだ直接的な原因です。このように第1の危機と第2の危機を招いた原因について、より深く理解するには、世界的な社会情勢と、そのなかでの日本の過去の農政や林政、さらには環境行政の歴史的な総括が必要でしょう。

環境問題としてのシカ問題

このような社会情勢下でシカ問題を含めた鳥獣害は、まず農林業被害として現れました。1980年代頃から鳥獣害は無視できない脅威となり、いまや中山間部では鳥獣害のためにほとんど作物の収穫が望めず、離農や離村を余儀なくされる最大の要因になっている地域も少なくありません。また林業ではせっかく新しく植えた苗木をカモシカやシカに喰われてしまうという深刻な問題となり、さまざまな対策が講じられてきました。しかし、1990年代までは農林業被害という枠組みで論じられており、まだまだ日本の自然そのものへの脅威とは受け取られていませんでした。あくまで人里や里山の

範囲、つまり人間活動が卓越する場所での現象だと考えられてきたのです。

ところが北海道・知床、本州・大台ヶ原と大峯、九州・屋久島など、シカの問題は日本を代表する原生的自然への脅威となっているのです。似たような現象は、関東では奥日光や丹沢、関西では芦生、九州では霧島など、各地域を代表するような奥山あるいは原生的自然で同時多発的に進行しています。世界的にみても自然公園や世界遺産登録地で同じような問題があり、スコットランドではアカシカが少なくとも40万頭以上に大発生し、「制御不能」といわれています。

コンサベーション・インターナショナルはアメリカ合衆国ワシントンに拠点をもち生物多様性の研究ならびに保全についての世界的なNGOですが、2004年、このNGOから日本列島は世界中に34ヶ所ある「世界でもっとも生物多様性が豊かな、かつ脅威に晒されているホットスポット」のひとつとして取り上げられました。これらのホットスポットは全地球表面積の15.7%を占めるに過ぎませんが、全世界の植物種の半数以上、また地上性の脊椎動物種の42%の生息地を擁しています。それぞれのホットスポットにのみ生息する地域固有の動植物がほとんどであるために、ここでの生物多様性保全に失敗すると、いかに他の地域で成功したとしても、世界の生物多様性に不可逆的な損失を与えるものであるとコンサベーション・インターナショナルは警告しています。

シカ問題は、地球温暖化やオゾン層破壊のような、現象としても影響の及ぶ範囲にしてもグローバルな、誰しものが地球環境問題と認識できるものではなく、それ自体はローカルな現象でそれぞれの地域に限定された影響しか与えないものかもしれません。しかし、日本各地で同じような問題が同時多発的に起こっていて、総合すると少なくとも東アジア全体、ひいては世界全体の森林動態や生物多様性に不可逆的な影響を及ぼすことが懸念されているという意味では、まさしく地球環境問題なのです。

問題解決にむけて

森林再生支援センターは活動の一環として、平成16年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成をいただき、特定非営利活動法人森林再生支援センターの主催、奈良教育大学、奈良新聞社、奈良県教育委員会、総合地球環境学研究所、関西自然保護機構、環境再生保全機構、環境省のご後援のもとに、2004年11月28日に奈良教育大学において、シンポジウム「シカと森の『今』をたしかめる」を開催して150名の方にご参加をいただきました。それに先立つ11月27日には、大台ヶ原でのエクスカージョンを実施し、講演者を含む83名の参加を得て、大台ヶ原のシカと森林の現状を目の当たりにしました。このシンポジウムをもとに、「世界遺産をシカが喰う」(湯本貴和・松田裕之編：文一総合出版)を2006年3月に上梓しました。



2004年11月27日 大台ヶ原でのエクスカージョンで防鹿柵を見学



2004年11月28日 シンポジウムの様子(奈良市：奈良教育大学講堂)

この「世界遺産をシカが喰う」では、まず、巨視的にみた日本全体のシカについての章を置きました。つぎにもともと農林業に対する被害が甚大であるために、早くからエゾシカの個体数調査や防除の実践がなされており、日本では唯一、長期にわたる正確なシカの個体数変動をベースにして理論的な議論ができる、いわば先進地域である北海道の例を、つぎに長い間、神鹿として保護されて餌付けされてきた奈良公園に隣接する春日山原生林のシカと、原生的自然である大台ヶ原のシカという対照的な状況での問題を比較して奈良県の例をとりあげました。加えて、シカと森というテーマではバックグラウンドに沈んでしまいがちな山村での人々の生活とその変化についての章を設けました。ここまでの例はほとんどが行政主導型といってもいいのですが、最後の屋久島のケースでは、初めから研究活動が地域の民間団体の参加を前提として進められて、ゴールとしての地域住民の合意形成が明確に意識されている取り組みを紹介しました。

ここでの議論の焦点は、1) 現実に進行している森林の変化はシカの影響であると断言できるのか？ 2) シカは本当に増えているのか？ 増えているとしたら、その原因は何なのか？ 3) では、この先、何が起こることが予想されて、対策はどうあるべきか？ の3点に尽きると考えられます。それぞれの事例はもとの自然も歴史も異なる場所でのケーススタディなのですが、一定の共通する方向のもとで研究計画が立てられています。まず、1) の問いに答えるには状況証拠だけではなく、防鹿柵を設置してその内外を較べるという実験的な手法が必要不可欠であると同時に、对症療法として希少な植物を守るにも防鹿柵が有効であることがわかります。さらに大台ヶ原の実験では、シカの影響は植物に限らず、昆虫や鳥類にまで影響が及ぶというデータが示されています。2) については、北海道以外では、まだ状況証拠で論じられている状態なので、正確なシカの個体数および植生の変化のモニタリングを並行してやっていくべきであるという結論に達します。この個体数の変動がきっちり把握

されないと、シカの増えた（かもしれないが、そうでないかもしれない）ことの原因についても、憶測の域をでないわけです。3) はもちろん発展途上の問いで、とくに今後、生態系全体がどう変化していくのかはなかなか予測が難しいといえます。単純にシカの数減らせばよいと論じている研究者はひとりもなく、シカの増えた根本原因を追究して、それを解決しなければならないというのが全員の共通認識です。しかし他方では、シカ問題に限らず、自然生態系に関する取り組みの困難さは、完全に学問的見解が固まっていないにもかかわらず、事態はどんどん進行し、手をこまねいているわけにはいかないという点です。そのためには、とにかく緊急に何としてでもシカの数減らす方策をとらないと植生に回復不可能な壊滅的な打撃を受けるというわたしたちの予測を、科学的根拠とともに主張したいというのが、この書の目的です。

また、ここにまとめた研究や実践の記録は、農林業への被害ではなく、自然植生への影響に偏っているという印象を与えるかもしれません。農林業被害も深刻なものであることは十分承知していますが、このシンポジウムでは、自然の声なき声を聞こう、そしてできることなら、その代弁者となろう、というのが趣旨であったことを改めてお断りしておきます。そのなかで「シカと森の『今』をたしかめる」というのは、実は「シカと森と人の『今』をたしかめる」ということに他ならないということをご理解いただければ、主催者代表としてたいへんありがたいと思います。



「世界遺産をシカから守れ - 大峯山脈の自然再生に向けて - 」

ワークショップ&写真展開催報告

2006年3月14日(火)に奈良県吉野郡天川村(天川山村開発センター)にて、「平成17年度 独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金」の助成金を受けて、住民・研究者・行政と一緒に大峯山脈のシカ密度の増加による植生への深刻なインパクトを評価し植生保全の方策をたてるための始めの一歩として、ワークショップ(同会場にて大峯山脈の過去と現在を見比べられる写真展「大峯の自然いま・むかし」)を開催しました。

【ワークショップ内容】

第 部 講演

「世界遺産をシカが喰う - シカによる植生の劣化は日本全国の問題 - 」

湯本貴和(総合地球環境学研究所)

「自然資源を守り村の将来を拓く - 天川村から大峯の自然再生を考える - 」

冨瀬 充(天川村役場)

第 部 報告・意見交換

「前鬼のモニタリングについて」

松井淳(奈良教育大学)

「屋久島におけるネイチャーガイド」

手塚賢至(ヤッタネ調査隊)

その後、松井淳さんに2005年夏～秋にかけて大峯山脈前鬼で行った植生調査の報告を、手塚賢至さんに屋久島でのネイチャーガイドの役割などの事例紹介をしていただきました。

最後に、参加者の皆さまと講演者で全体討論(質問や意見交換)を40分ほど行いました。

参加者は63名で、そのうち地元(奈良県吉野郡)からの参加が約1/3(天川村役場の方含む)、吉野郡以外の奈良県内からの参加が約1/3、スタッフを含め奈良県外からの参加者が約1/3でした。

当日回収したアンケートにあった感想・意見を地元の方、その他の方に分けて集計してみました。地元の方々からは「早く何か行動しなければ」という意見が多いように感じました。以下、簡単に参加者からの意見を挙げておきます。

<地元(奈良県吉野郡)からの参加者>

- ・自然環境を守るための手だてを考えていきたい。
- ・一人一人の小さな心がけで自然を守ることができないだろうか、今一度改めて考えていきたいと思う。
- ・動物が里まで下りてこなければなくなった今をなぜだろうと皆で話し合える場等、大切なことと思う。
- ・美味しい空気と水を味わえる姿を残したい。
- ・今後 林業について、産業について、暮らしについて、語り合いができる会に発展するように期待している。
- ・クヌギ系の植林を行うべき。



ワークショップ風景

最初に、湯本貴和さんに知床や屋久島、大台・大峯といった世界遺産ともなっている地域のシカによる自然植生へのインパクトについて、つぎに天川村役場の冨瀬充さんに、大峯の歴史、天川村の現状、ここ10年の自然環境の変化についてお話しいただきました。

- ・行政の本格的な自然林に対する取り組みと住民が参加する制度が必要。
- ・私達がこの地に生まれ、この天川の自然を守らねばならない使命があるということ、村民たちひとりひとりの意識付けが大切なのは。
- ・このようなワークショップ開催の際には、村民の人達にもっと呼びかけが大切なのは。
- ・森の木々たちの寿命を考えると、10年後どうなっているか？今もっと皆さんが立ち上がり自然再生に向けて動いていかなければ手遅れになってしまうのでは。
- ・最近の山の状態をよく耳にしたが、それほど危機感がなく、ただ話として過ごしていたが、こうしてワークショップに参加して話だけで終わらせてはいけない、何か自分でもできることはないか？スタート地点に立った思い。
- ・シカの食害があきらかなので、まずはシカの駆除に早くとりくむべき。
- ・地元に住む人間として、とても考えさせられることの多い貴重なワークショップだった。参加して良かったと思う。
- ・昭和30年代の大峯・大台の姿を思い浮かべ現在の状況を憂えている。この状況はただシカの害だけでなく酸性雨や広葉樹林の伐採等の複合から危機的状況になったもので、これを再生するのに百年単位の年数がかかるものと考え。そうした中でどの様な方法が効果的であるのか多くの方々の意見を聞きたい。
- ・私は学問的な事はわからないが、柵をしてシカに食べられない様にするると自然が再生している。だからシカの害だと思っている。それはシカの食性が変わったのか？シカの数が増えたのか？シカが多すぎるなら駆除することが一番だと思う。自然の中に人工的なものを造って、何が自然だ？今、自然を救うべし、学者の話は後まわしでよい。
- ・シカとサルを少なくして欲しい。家のワクまで入って困っている。

< 地元以外からの参加者 >

- ・モニタリング調査等の研究の先に見えるビジョン、もしくは、調査結果（経過）を利用する予定・方法などを知りたいと思った。

- ・地元の人の声に関してはとても興味深く聞いた。この問題が村全体の問題になることを願っている。
- ・それぞれ違う立場の人々が歩み寄っていくことの大変さを感じた。しかし、大変であるとわかっていながらも始めの一歩としてこのワークショップを開催したことはとても意義のあることだと思う。
- ・自分自身ももっと広い視野を持って考えていけるようになりたいと感じることもでき、この会に参加できたことを嬉しく思った。
- ・ある種、専門的で難しいところがある。
- ・どういう方向に導こうとしているのか見えづらい面がある。
- ・「シカ」についてならばなぜシカとの共存をしている奈良市の関係者がいないのか？
- ・自然はそこに暮らす人々が守るもの。もっと地元の思いや意見を主体にすべき。
- ・主催者・参加者の意見がずいぶん違う。自分と違う意見も聞くことも必要。いろんな視点での討論が聞ければと思うが、それだけの回数がこなせるか？
- ・広い視野からの意見で参考になった。いつまでも少しでも豊かな自然が残るようにみんなで力を合わせて蘇らせた。
- ・シカの食害に関して以前から関心をもっている。この問題を世間に訴える手段としてこのような催しは効果的。
- ・議論が舌足らずで物足りなかったが、昔の自然にもどしていくことと地域再生が大事だという視点が確認されたのはよかった。
- ・地域再生と自然再生の相互関係を、どちらにも均等に重点をおいて考えていかなければ、今日の意見交換が次に繋がっていかないと思った。
- ・地域の方々の意見を直接聞くことができ、とても良い経験になった。やはり、考える事が全く違うこともあると知った。
- ・地元の方の意見を聞いたことが良かった。「自然再生」に向けて、地域の方の参加、地域の活性化の方法を探ることが不可欠だと感じた。今日の議論を、地元の方と一緒にもっと深めていくような場ができればいいと感じた。
- ・開発されたものだけでなく、従来から引き継が

れた貴重な自然環境も観光振興のための重要な素材であることが実感できた。この自然との関わり方の歴史に「文化」を感じた。この「文化」を発信し続けてもらいたいし、それをPRするお手伝いが出来ればよいと考えている。いつものことながら「自然」ということばへの認識の共有が難しく、議論をややこしくしていると思った。

これらの意見を受けて、2006年6月19日(月)に「(仮称)天川村大峯山自然再生協議会 設立準備会」(天川村地域政策課主催)が奈良県橿原市で開催されました。本センターからは委員と

して、専門委員4名が出席しました。

この1回目の設立準備会では、天川村役場の方より天川村・大峯山の概要、歴史、現状についての説明、天然記念物にも指定されている「キリクチ」について以前から天川村で調査・研究をしている三重大学大学院生より説明があった後、今後の協議会の進め方、協議会構成員の公募の仕方などについて話し合われました。

～活動報告～

「比叡山『ほうとうの森』大植樹祭」に質問状を提出

2006年5月27日(土)に開催されました「比叡山『ほうとうの森』大植樹祭」(毎日新聞創刊135年記念事業委員会主催)に植栽予定樹種等に関する情報公開を求める質問状を森林再生支援センターが提出しました。その経緯を実際にやりとりした質問状と回答書にてご報告させていただきます。

はじめに

毎日新聞創刊135年と天台宗開宗1200年を記念した「比叡山『ほうとうの森』大植樹祭」(毎日新聞社、天台宗開宗1200年事務局、比叡山延暦寺共催)が5月27日、比叡山延暦寺境内で行われます。全国公募による参加者1200人が、広葉樹の苗木1万2000本を植樹。1200年の時を越えて「不滅の法灯(ほうとう)」がまたたく世界文化遺産「比叡山延暦寺」を舞台に、自然環境保護を啓発する関西のシンボルイベントとなります。

植樹は、シラカシ、アラカシ、ヤマザクラなど広葉樹の苗木を植えます。植樹の指導は財団法人・国際生態学センター(JISE、横浜市)研究所長の宮脇昭・横浜国立大学名誉教授。全国1220ヵ所、海外300ヵ所で計3000万本の指導実績を持つ植樹指導の世界的権威。約100人の植樹リーダーが参加者全員の植え付け作業をお手伝いします。植樹地は、奥比叡ドライブウェイ沿いに位置する

「峰道レストラン」周辺。古今を通じて修行僧の険しい“行者道”で、今はハイカーも多く訪れる自然道の両脇に植える予定です。

【毎日新聞社HPより】

本センターの専門委員から比叡山で大規模な植樹祭が行われるという情報が届いた。

あの比叡山のどこにどんな木を植えるのか？比叡山の自然にはわが国有数の大径木からなるモミ天然林が残っているが植栽樹種にモミがない、どうしてか？毎日新聞社の記事からは具体的なことがわからない。

そこで、今イベントを企画している毎日新聞社にそれらの情報公開を求め、適切な樹種で適切な出自の苗木であるか確認をしようと質問状を提出することになった。

毎日新聞社の企画する「大槭樹祭」に対する質問状

特定非営利活動法人森林再生支援センター
理事長 村田 眞 毅



拝啓のころを記し、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
来る2006年5月27日、比叡山延暦寺と毎日新聞社の主催で、市民ボランティア1200人による「大槭樹祭」が山内・峰道レストラン周辺で開催されていることを私どもは聞き及びました(2006年2月21日付毎日新聞)。

比叡山延暦寺山内の森林は、長年におたる延暦寺一山のご賢方によってすぐれた自然環境を醸成されてきたことを、私どもはよく承知しております。とりわけ、標高1m、樹高40mにも及びそでの巨樹を数多く有するオシロイ、ヌグヤシノキの森林によって大きく森の様相が変化したのが因にあって、残された数少ないオシロイ林として、学術的にも景観的にも大変すぐれたものであると理解しています。

反面、今回の植樹祭予定地付近においては、かつて植林されたオシロイの森が周辺部に拡大し、地域全体からみて自然植生が著しく潤なわっている状況の中で、冠雪、シカによる被害が著しく、次世代の植樹が容易な環境へと変わってきています。さらにこのオシロイを一部取り除く形で林道が敷設されたこともあり、今回企画されているような、森林が失われた林道沿いを中心に、市民や子どもたちの協力も募ながら、森を蘇らせようという試みは、大いに敬意を払うべきものであると考えています。

私どもは、昨今における日本の自然がおかれている現状を深く憂慮し、地域の文化と風土にふさわしい地域固有の自然を再生しようとして、2000年から特定非営利法人として活動してまいりました(Corp/www.crcs.net)。各地でおこなわれている森を蘇らせる試みについて、私どもがこれまで得てきた専門的な知見からみて、少なくとも次の条件が満足されていないと判断されたいと考えられます。

1. できる限り、その地域の自然がもつ本来の回復力に委ねること
2. 苗木だけでなく、地域生態系全体の健全に寄与する結びつきであること
3. 地域(ここでは歴史・文化、さらに世界文化遺産である延暦寺)にとって、すぐれた景観となるものであること
4. 西山拾水の観点から、景観的に問題がないこと
5. 一過性のイベントではなく、継続的に守り育てる事業の一環となること
6. 以上の条件を満たすかどうかを、第三者が客観的に判断できるように、必要な情報が開示されること

以上の観点に立ったとき、今回計画されている大槭樹祭の結びつきにはいくつかの疑問点が湧いてまいりましたので、ここで質問状というかたちで、主催者としてのご回答をお願いすることにいたしました。

まず、植えようとする苗木が、その地域の固有自然植生の構成種として適当かどうかということがもっとも重要なポイントであることは論をまちません。とくに自然再生を目指した植樹においては、地域生態系全体の健全を保全するために、樹種だけではなく、それぞれの樹種の地域固有林群の遺伝子組成を反映した地域産苗木を選択していくべきであるとして、日本生態学会や日本緑化工学会が強く提言しています(たとえば、「生物多様性緑化ハンドブック―豊かな環境と生態系を保全・創出するための計画と技術」亀山幸監修、2006年、地人書館)。そこで、

質問1. もともと尾根筋に近い植樹予定地では、周辺部に広くオシロイ林がみられたのですが、そのオシロイが植樹予定地帯に入っていない理由は何でしょうか?

シラカシの植樹が予定されているようですが、この辺地にはシラカシはみられず、かなり距離が離れ、土質条件も異なる中古生層を基礎とする京都・華岡山などの深土帯のところではオシロイがみられるにすぎません。植樹予定のシラカシ苗木は、どのような遺伝的系統をもつものでしょうか?同様に植樹が予定されているアラカシやヤマザクラについても、苗木はどのような遺伝的系統のものでしょうか?

これらのことを含めて、植樹予定の苗木リストとその選別根拠、それも苗木の出自についての情報を開示がいただけないでしょうか?

つぎに、地域的自然の持つ回復力に委ねる基盤となる適地適木、つまり、山の微地形、水みち、土質、風当たりなどに十分配慮した植樹計画であるかどうかという点です。1万2000本という少なからずの苗木の植樹が予定されていますが、高緑地帯樹種を高密度植樹によって多量に植える場合、従来の経験上、それぞれの木が肥大成長せず、やがて高密度のまま、白根などで倒壊することを懸念しております。また、樹高競争によって、少数の樹種だけが林冠を形成して林冠高が落ちてしまい、林内光環境が近しくなる一斉林的な状態になることによって、林床草本群集をはじめとした本来の生物多様性が損なわれる恐れもあります。ここでは、植樹後の維持管理体制がきわめて重要です。そこで、

質問2. 植樹方法によっては、苗木の植栽位置を地形、地質、気象条件、樹種の特徴に応じた組み合わせ、間隔などを考慮したきめ細かな計画により、植樹苗木一本ずつの位置を専門家が決めた上で、ボランティアの方々に植えていただくスタイルをとっているところがありますが、そういう体制は十分に配慮されているのでしょうか?また苗木植栽後の維持管理計画はどのようになっているのでしょうか?

植樹地のマップ上に作成された具体的な植樹計画と今後の維持管理のタイムテーブルを御開示いただけないでしょうか?

比叡山延暦寺といえば「世界遺産」の地であると同時に、世界宗教者会議でもきわめて重要な役割を果たしておられる、まさに日本の心のあるさと、世界の心のあるところ。この地にて、きちんとした学術的な裏づけを配った計画で、若者男女がこぞで取り組めるような、地元の種子から苗木を育て、細かな配慮で苗木を植栽して、立木ばかりではなく苗木や苗木、鳥類、哺乳類、菌類を含めた森林生態系を息長く育成していく、長期的な取り組みを企画されることになれば、その波及効果は計り知れないと、私どもは大きな期待をしております。このことが、「山川草木悉有仏性」あるいは「草木国土悉皆成佛」という天台宗の教えにも沿うところではなからうかと、愚考いたしている次第であります。幸い、比叡山では高度成長期以前の森林の様子が学術的なかたちで調査・記録されており(たとえば、「比叡山―その自然と人文」北村四郎・菅山幸樹・森岡謙六編、1981年、京楽新聞社)ので、学術的な視点に則った自然再生への道は開けていると考えております。

以上のことに鑑みて、今回の大槭樹祭に対する私どもの疑問点について、ご回答いただくようにお願い申し上げます。なお、大槭樹祭実施が迫っておりますので、緊急のご返答を重なお願ひ申し上げます。

<連絡先>
特定非営利活動法人 森林再生支援センター
〒603-8145 京都府京都市北区小山園地町28-5
TEL: 075-211-4222 FAX: 075-211-4145
E-mail: greenhelp@pop.ne.jp

植栽予定地は自然保護上重要な場所であるので、植栽予定樹種、苗木の出自、具体的な植栽計画や維持管理方法等について情報公開を求める上記の質問状を提出。その後、5月1日に記者会見を行い(於:西本願寺宗教記者クラブ)、毎日新聞社への質問状を公開した。下記の回答書は記者会見の2時間ほど前に届いた。

2006年5月1日

特定非営利活動法人森林再生支援センター
理事長 村田 眞 毅
毎日新聞創刊135年記念事業委員会
事務局長 渡田 義男

拝啓 新緑の候、甚々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

適日2006年4月24日付け弊社にて文書「毎日新聞社の企画する『大槭樹祭』に対する質問状」に、当該事業を所管する小職よりお答えいたします。

ご植樹の植樹祭、毎日新聞が創刊135年記念事業の一環として、本年5月27日に比叡山延暦寺と共催する「比叡山『ほうとうの森』大槭樹祭」については、本年2月21日毎日新聞朝刊の社告ならびに特集記事において評価していますが、村田理事長をはじめ貴センターの皆様にはこれらの記事をご覧いただいたうえでのご質問と御察いたします。記事にもありますように、毎日新聞社が、開宗1200年を記念された天台宗、比叡山延暦寺様との共催によりこの植樹事業を挙げるにあたり、歴史的な形を供託国立大学名誉教授で野田法人・国際生態学センター研究所長の宮脇昭先生にお願ひしています。宮脇先生は、ご専門である植物生態学の長年の研究と、広範な調査実績に基づいて、いわゆる「ふるさとの木によるふるさとの森づくり」活動を、三十数年余全国1220箇所余、海外およそ300カ所で開催してこれ、3000万本以上の植樹指導実績を積み重ねておられます。毎日新聞は、先生のこの能力的な植樹指導を数年来支援させていただいております。その関係から、本年07月21日に読めます創刊135年記念事業の歴史的なご指導をお願いしたところで、(宮脇先生へのご支援の事例を紹介する記事コピーの一部を添付します)

ご質問への回答は、植樹の樹種や植樹方法など植樹事業の具体的な内容にかかわりますので、宮脇先生にお願ひしました。先生のご回答文書を添付いたします。

宮脇先生も文書の中で触れておられますが、今回の植樹は、世界遺産である比叡山延暦寺の森林環境整備に協力するため、広く市民参加を呼びかけて、民間の力を活用する形で進めようという事業企画です。比叡山の森林は歴史、スギ杉などの産出が盛んで、森林を管理する延暦寺様ご自身がこの数年、広業センターの植樹への転換も視野に森林再生事業を実施してこられた経緯があります。毎日新聞は、こうした森林環境整備を支援、協力させていただくために今回の植樹祭を企画した次第です。(参考:比叡山延暦寺学問所長の小林隆彰大僧正のインタビュー記事を添付します)

植樹祭の実施にあたっては、毎日新聞紙上などで、全国の市民をはじめ各団体の皆様にご協力を呼びかけております。貴センターにも是非、植樹祭へのご協賛ご支援を賜りたく、宮脇先生との意見交換を含めて、ご高配を期待しておりますことを付言して、回答といたします。

敬具

今回の比叡山の植樹について、いろいろと御関心をもち、貴重なアドバイスを戴き有難うございます。以下に要点のみお答えさせていただきます。

質問1 回答:

モミなど針葉樹は、エコロジカルにみると広葉樹よりも競争力が弱く、自然伏強では尾根筋、急斜面などの土壌の浅い酸い立地に局地的に自生しています。またモミ属 Abies (アビエス) 属は、大気汚染(硫黄酸化物など)に最も敏感で、地球規模でも、ドイツの黒い森をはじめ各地で工場や車の排気ガスで立ち枯れ、枯死しています。東京周辺でも1970年代から地ご姿を減らしました。丹沢山塊の大山ではお寺の裏山のモミも全面枯死しています。幸いにも比叡山の尾根沿いには、まだ残っていますが、草道沿いなどでは、植えても弱り、枯死する危険性が高いのではないかと危惧されます。

今回の植樹予定地は、我々の植生調査結果では、基本的には現在の潜在自然植生は常緑カンシ林域です。土壌の浅い岩場に近しいところなどはウラジロガシ、アカガシなど、土壌条件が良くなるに従って、アラカシ、さらに良いところはシラカシが、現在の潜在自然植生域と判定しています。原(始)植生、すなわち元の植生と、過去から現在まで様々な人間の直接、間接の影響を受けている today's potential natural vegetation とは必ずしも一致しません。

植樹苗木は、できるだけ、植樹地に近いところから採取した種子から育てております。スカンジナビア半島に位置する森林国スウェーデンでは南北1500°、以上の国土を南、中、北と3帯に分けて、その中での種子や苗木を使っています。

適地適木は当然のことです。土地本来の自然の森に近い樹木の再生には、人間が勝手に机上で決めないで現場で森のシステムに即って、現在の潜在自然植生の主木群を中心に、その森の構成種をできるだけ多く、混植・密植しています(ポルネオの自然林内の林内では、多いところは、林床に500本/㎡以上が芽生えている例もあります)。ポット苗を混植・密植すると密度効果により生育がよくなるので、植樹後1~2年、太陽の直射光が林床に透入するところでは、陽性の陽化樹草が生えるので抜いてマルチングします。3~4年経ったらあとは自然淘汰によって個々の種の特徴に応じて土地本来の多層群落を形成させます。植樹後10年日ぐらいいはなかなか淘汰が進まず、密生しているうえですが20年以上経つと、自然林に近い多層群落を形成しています。(例 横浜国立大学キャンパス内、新日鉄の各製鉄所、各電力会社の防災環境保全林など)。過去30年余り、国内だけでも1200カ所以上で植樹の指導をしております。

潜在自然植生の主木種の根群の充実したポット苗などの混植・密植で倒壊した例はありません(但し我々が植えている土地本来の主木を主とした混植性、直根性の広葉樹の場合)。

20年以上経つと、陰樹の林床植生も次第に芽生えてきます。

質問2 回答:

植樹法は、その土地の立地条件に応じて樹種を組み合わせて植樹を行っています。

植樹後2~3年間、陽性の陽化植物の雑草などが繁茂した場合は、抜き取ってマルチングに替っています。4~5年経ったら自然の管理に委ねます。5年経っても管理が必要なのは、人間が特別な目的を持って、土地に合わない奇異樹種などを植えた場合です。

「世界遺産」であり、世界に誇る日本人の心と森が共生する、土地本来の災害に強く、仏心の宿る、日本文化の原点としての日本古来の1000年までも残る鎮守の森をつくる目的で植樹帯を行います。是非、皆さんも参加して、汗を流して共に植えて下さい。問題があるようでしたら、是非、一般論でなしに、現場で共に木を植え、森を育てながら議論し、教えて下さい。是非私も、長い間でそれぞれの分野で研究しておられる皆様の御教示を得ながら、より Best の生態学的な本物の防災・環境保全林を育てたいと念じています。そして生育状態を厳しい科学的批判眼と、いのちを育てる暖かい心で共に育てがんばりたいと希望しています。

重ねて、皆様のご助言感謝しています。今後とも、率直な御教示をお願い申し上げます。

宮脇 昭

上記のように毎日新聞創刊135年記念事業委員会事務局と、今回、植栽指導を行っておられる宮脇昭氏より回答書が届いたが、具体的な樹種名や植栽計画に関する記載がなかったため、再度、情報公開を求める質問状を提出。

毎日新聞社 毎日新聞創刊135年記念事業委員会御中

毎日新聞社「大植樹祭」質問状に対するご回答へのお礼と再質問



再読の儀、貴社ますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。弊センターが2006年4月26日付けにて送付させていただきました「毎日新聞社の企画する「大植樹祭」に対する質問状」に早急なご回答を賜り、深くお礼申し上げます。また、宮脇昭先生には、たいへんお忙しいなかでご回答をお寄せいただきまして、ありがとうございます。改めて、今回の「大植樹祭」への宮脇先生の御気遣いにも深く感謝を受けた次第でございます。

しかしながら、2006年5月1日付け回答書では、なお不明な点いくつかございました。とくに「植樹苗本は、できるだけ、植樹地に近いところから採取した種子から育てて」とご回答いただいておりますが、わたしたちはここが宮脇先生の御用所どころを真に実現する非営利となっているか否かを第三者が究極の。まわめてたいへん重要なポイントであると認識しております。つきましては、改めて、具体的な植栽予定の樹木種リストと、それら苗木の出自(抽象的な「近いところ」ではなく、採種場所の地名)についての情報を御持ちでしたらお慰めいただくように、重ねてお願い申し上げます。

是非重芳事務局長のご回答には、「宮脇先生との意見交換を」とのお申し出もございましたので、連休中ではございますが、できるだけ早急にそちら側のご都合のよい日時をお知らせいたしましたら、幸甚に存じます。

<連絡先>

特定非営利活動法人 森林再生支援センター
〒903-8145 東京都京都市北区小田原池町28-5
TEL: 075-211-4229 FAX: 075-211-4146
E-mail: greenhelp@osp.np.jp

下記のように、「具体的な植栽予定の樹木種リスト」と「それらの苗木の出自(抽象的な「近いところ」ではなく、採種場所の地名)」についての情報については1週間以内にお返事をするという回答書がまず届いた。この中にある、宮脇氏との意見交換については、本センターの理事と都合が合わずお断りをした。

特定非営利活動法人 森林再生支援センター
理事長 利田 源 隆

2006年5月8日

毎日新聞創刊135年記念事業委員会
事務局長 星田 朝男

回 答 書

前略 5月2日付け「毎日新聞社「大植樹祭」質問状に対するご回答へのお礼と再質問」にお答えいたします。

直感からのご質問に対する弊社の5月1日付け回答ならびに宮脇昭・横浜国立大学名誉教授の回答書になお不明な点いくつかあるとして、再度ご質問の、①具体的な植栽予定の樹木種リスト②それら苗木の出自(抽象的な「近いところ」ではなく、採種場所の地名) ③についての情報のご希望については、宮脇先生のご指導のもと植栽する樹種を決定し、1週間以内に、弊社創刊135年記念事業委員会より御返答申し上げます。

宮脇先生との「意見交換」の日時については、宮脇先生のご都合では、比叡山の植樹祭目的の場合は30日18時~が可成りとのことです。なお、場所は、横浜市中央区新田成人国際学生センター(中区山下町32 横浜合同庁舎6階)の宮脇先生の研究室にてお願いしたいとのことです。5月中は、このほかは学会、植樹関連の日程が続いておられるので難しい状況です。6月ならば13日か14日が今のところ、時間調整が可能とのことです。取り急ぎ、回答申し上げます。 敬々

連絡先: 毎日新聞創刊135年記念事業委員会事務局
〒100-8081 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 毎日新聞社3F
電話: 03-3212-0808 7分31 03-3208-4946
FAX: 03-3212-0808



回 答 書

前掲 5月2日付け「毎日新聞社『大嶽樹林』質問状に対するご回答へのお礼と再質問」へのお答えを同 8 日付けで送達させていただきましたが、再度ご質問のうち、①具体的な植栽予定の樹木種リストとそれらの苗木の出自（商業的な「若いところ」ではなく、保護樹木の地名）——についての情報をご希望でしたので、別紙「産地証明書」にありますとおり情報開示いたします。

苗木情報の提供は、宮崎県・福岡県立大学名誉教授のご指導によるものです。苗木の生産地は、できるだけ植栽地に近いところから採取した種子から育てるという宮崎先生のご指導を踏まえて調達します。現在の保護樹木生産地は比叡山から約 300 ㊦以内の近畿・東海地方です。

宮崎先生との「意見交換」については、貴社より、ご要望の場合は改めてご連絡がいただけること、宮崎先生にお伝えしご理解いただきました。

取り急ぎ、回答申し上げます。

敬 啓

連絡先：毎日新聞刊行135年記念事業委員会事務局
〒100-8051 東京都千代田区千代田1-1-1 毎日新聞ビル3F
電話：03-3210-0908 FAX：03-3208-4845
E-MAIL：sofa.akase@nma.maiichi.co.jp

産 地 証 明 書

- 品 名：植栽工用 ポット苗
- 品 目：ビニールポットと培養土で育成管理した、樹木の充実した苗木植物体
- 原 料：苗木、培養土、ポット容器
- 規 格：ポット容器 コンテナ径 15cm
- 生産方法：種子より、播種・かん水し、発芽した苗木等をポット容器、培養土を埋め移植し、苗木の根葉が十分に発達するまで専用の生産圃場にて2〜3年間定期的な管理をおこなった苗木体。

6. 産 地：日本国内、以下の通り

樹 木 種 名	規格・仕様	生産地	備 考
アラカシ	2〜3年生	愛知県江南市	
アカガシ	*	兵庫県姫路市	
イスノキ	*	愛知県江南市	
イチイガシ	*	*	
ウラジロガシ	*	*	
コブシ	*	兵庫県養父市	
シラカシ	*	愛知県江南市	
スダジイ	*	愛知県江南市	
ナツツバキ	*	兵庫県千種町	
ヤマザクラ	*	兵庫県東条町	
ヤマボウシ	*	兵庫県神戸市	
ツタバネガシ	*	愛知県小牧市	
イタヤカエデ	*	兵庫県村岡町	
イロハモミジ	*	愛知県大口町	
カタレミノ	*	愛知県江南市	
サカキ	*	愛知県大山市	
サンゴジュ	*	*	
シロダモ	*	愛知県江南市	
ソヨゴ	*	愛知県大山市	
ネズミモチ	*	愛知県江南市	
ヒメズリハ	*	愛知県大口町	
モチノキ	*	愛知県江南市	
ヤブツバキ	*	*	
ヤマモモ	*	愛知県扶桑町	
ユズリハ	*	愛知県大口町	
ホウノキ	*	兵庫県村岡町	

上記の「産地証明書」という形で、具体的な植栽予定の樹木種リスト」と「それらの苗木の出自」の回答書が届いた。

このリストより、植栽予定 26 種の樹種のなかで、9 種類もの樹種が比叡山にとって現在はまったくみられず、いまは失われてしまった過去の潜在植生のものですらない可能性がある

ことがわった。そこで、これらの樹種を植栽する理由を問う質問状を再度提出した。

2006年6月16日

毎日新聞社 毎日新聞刊行135年記念事業委員会幹事

毎日新聞社「大嶽樹林」質問状に対するご回答へのお礼と再々質問



新緑の候、貴社ますますご盛況のこととお慶び申し上げます。

弊センターが2006年5月2日付けにて送付させていただきました「毎日新聞社『大嶽樹林』質問状に対するご回答へのお礼と再質問」について、植栽予定の樹木種リストとそれらの産地証明書をお送りいただきまして、ありがとうございます。

その樹木種リストと産地証明書を拝見して、改めて質問をさせていただきます。

- イスノキは九州の暖帯系の原産樹林を構成する重要な樹種で、確かに東海地方に高すぎる記録がありますが、本件ではおおむね標高 300m 以下の低山域に分布するものと見做し、比叡山に分布した記録はありません。あえて比叡山に植栽する理由をお教えてください。
- イチイガシは西樺日本の低地暖帯樹林で重要な樹種ですが、適湿またはやや湿気のある肥沃な黒礫土を好み、苔あひあるいし平地に生育するものです。近畿では奈良の奈良公園や春日山、京都でも京都霊山・扇状地上の北寺林に残存する個体はありますが、比叡山に分布した記録はありません。あえて比叡山に植栽する理由をお教えてください。
- コブシ、ナツツバキ（人為的植栽を除く）、サンゴジュ（人為的植栽を除く）、ヒメズリハ、ヤマモモ、カタレミノも比叡山に分布した記録がありません。スダジイについては、比叡山につながる京都盆地の多くはフツブジイであり、スダジイとはっきり識別できるものはありません。このような情報をあえて比叡山に植栽する理由をお教えてください。
- 産地証明書に愛知県江南市などの記載がみられますが、これらの多くは育苗地であって、植栽地ではないかと感じますが、いかがでしょうか。

植栽予定地は、標高、地形・土質的にみても近接でわずかに残存する貴重なモミ林の成立する条件と等しく、自然を再生する、あるいは地域生態系の一部となるべき潜在自然植生となる森を育てようとするならば、モミの苗木が植栽予定に含まれることは当然だと考えられます。

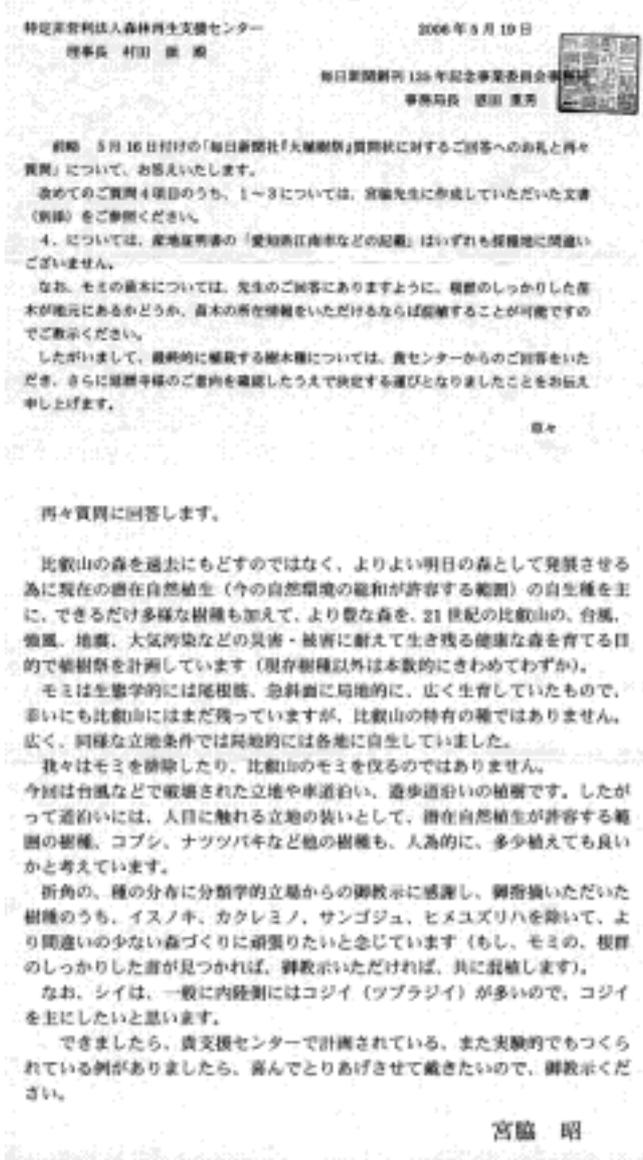
しかし、それが含まれないどころか、植栽予定 26 種の樹種のなかで、9 種類もの樹種が比叡山にとって現在まったくみられず、いまは失われてしまった過去の潜在植生のものですらない可能性があるという懸念たる結果に、わたしどもは驚愕するばかりです。

「世界遺産」の地であると同時に、世界宗教者会議でもきわめて重要な役割を果たしておられる、まさに日本の心ふるさと、世界の心のよりどころである比叡山の潜在的な植生を回復させようとなさっている計画が、このような科学的な根拠に乏しい計画で押し進められていることに、あらためて大きな懸念を抱いた次第であります。

蒸づくりは、もとより時間のかかるものです。ここで迅速に事業を進めて将来に植栽を獲すよりも、きちんとした学問的な裏づけをもって樹種を選択し、地元の種子から苗木を育て、細かい配慮で苗木を植栽し、立木ばかりではなく苗木や昆虫、鳥類、哺乳類、菌類を含めた森林生態系を豊かに育成していくような計画に変更していただくことを、わたしどもは切に希望いたします。また、そのような計画を立案するにあたっては、わたしどもはこの地で植栽を学ばせていただいた卒業生として、誠心誠意、最大限の協力をいたす所存であることも、あわせてお伝えいたします。

<連絡先>

特定非営利活動法人 森林再生支援センター
〒600-8145 京都府京都市北区小山崎町 29-5
TEL：075-211-4259 FAX：075-211-4145
E-mail：greenhelp@ppp.ne.jp



植樹祭開催の1週間ほど前に上記の回答書が届いた。

本センターが指摘した9種のうち、イスノキ、カクレミノ、サンゴジュ、ヒメユズリハの4種は植栽樹種から除き、スタジイはツブラジイに変更、その他の4種については、人目に触れる立地の装いとして、潜在自然植生が許容する範囲の樹種で、人為的に多少植えても良いという考えで植栽をするとの回答であった。

モミのしっかりした苗木が見つければ、一緒に植樹をしてもよいともあったが、時間がなかった。

大植樹祭開催1週間後の2006年6月3日(土)に本センター理事らと情報開示にいたらなかった植栽場所の確認と、植栽樹種のその後の確認に比叡山の植栽現場に行ってきた。

植栽現場は、比叡山峰道レストラン近くの千年の伝統をもつ元三大師道と呼ばれる古道に沿った2ヘクタール以上におよぶ区域であった。かつてモミの天然林であったところを少数のモミの大木を伐採して、スギやヒノキを植えてできあがった人工林もあり、ところどころにモミの大木が残っていた。

その人工林の一部に間伐を行って、それでも暗い人工林の林床に苗木は植えられていた。



人工林の林床に植栽された苗木がある

植えられている樹種は、シラカシ、アカガシ、アラカシ、ヤマザクラ、ヤマボウシ、シロダモ、ヤマモモなどが目立ち、すでにヤマザクラの多くはシカによる食害を受けていた。

いくら耐陰性の高い常緑広葉樹といっても、上に伸びるためには相当の光を必要とするが、植えられている場所の多くははるかにそれより暗い林内であった。

今後の調査を待たなければならないが、これなら90%は3年ももたないであろうと思われた。

また、苗木を見たところ、アラカシは葉柄の比較的長くなる滋賀県産のものと異なり、おそらく九州産のものであろうと思われ、イロハモミジは葉が異様に深く切れ込む（深裂する）栽培品種が混じっていたりした。このように植えてはいけないものを持ち込んではいけない。



深裂しているイロハモミジ



葉柄が短めのアラカシ

初めから枯れることがわかっているような場所に、大量の苗木を、多数のボランティアを全国から呼び寄せてお金を集め、それを「環境保全」や「自然保護」といった正義の旗印の下で行うといった植樹祭が許されても良いのでしょうか。

大勢の方々の善意で行われた植樹である。

参加されたボランティアの皆さまのお気持ちと、植栽された苗木のいのちを考えると、きちんとした準備がなされず行われた企画であったように思え残念でならない。

記録：事務局



植栽現場のそばに立つ看板

センター事務局よりお知らせ

～「世界遺産をシカが喰う シカと森の生態学」が出版～

昨年度、地球環境基金助成金により開催した、シンポジウム「シカと森の『今』をたしかめる」の内容が講演者による執筆で、文一総合出版より単行本として2006年3月31日に出版されました(5月下旬には重版も)。本センター会員の皆さまは下記の要領で出版社へ申し込みますと著者割引で購入できます。

内容につきましては前号ニュースレターまたは本センターホームページをご参照ください。

著者割引購入の方法

下記の必要事項を記入の上、出版社の担当者に直接メール、ファックス、はがきで注文してください。

- 1 著者割り注文の案内元: 森林再生支援センター
- 2 本のタイトル: 世界遺産をシカが喰う シカと森の生態学
- 3 必要部数:
- 4 注文者氏名:
- 5 送付先住所:
- 6 電話番号:
- 7 公費購入の場合必要書類と注意事項(日付ブック、宛先など):

申込先: 文一総合出版 担当: 菊地千尋

メールの場合: charlie@bun-ichi.co.jp

ファックスの場合: 03-3269-1402(必ず菊地宛にお送りください)

はがきの場合:

〒162-0812 東京都新宿区西五軒町 2-5
株式会社文一総合出版 編集部 菊地宛

著者割引価格

税込 2,016 円です(2割引)。

このほかに送料210円(8冊まで一律)がかかります。8冊以上を同一箇所に一度に送る場合は送料無料で。

支払い方法

代金は後払いです。本と一緒に請求書、郵便振替用紙が送られてきますので、振替用紙を利用して郵便局から振り込んでください。振り込み手数料は無料です(銀行振り込みもできますが、その場合は手数料がかかります)。

～「尾瀬の森を知る ナチュラリスト講座」が出版～

2002年秋～2005年秋の3年間、調査に入った尾瀬・戸倉山林の森について、調査記録をもとに、自然資源の豊かさをさまざまな角度から紹介し、自然から学べる知恵を示すこと



を目的に、本センター理事 高田研一が書き下ろしました。

本センターで購入すると著者割引になりますので、会員の皆さままでご購入いただける方は、本センター事務局までお名前、ご連絡先、冊数をお知らせください。送料込み1,500円でお送りいたします(本と一緒に振込用紙をお送りいたしますのでお振込みください。手数料のご負担をお願い致します)。

内容(目次)

第1章 クロベの森の謎

～数千年壊れることのなかった森

第2章 不思議なこびとたちの森

～蛇紋岩地に生きる植物

第3章 ダケカンバという生き方

～壊れる森を求めて

第4章 ブナの森と「ブナボラ」～王様と人のチカラ

第5章 山のかたちが森のかたちを決める

～遠くから見る景色を考える

第6章 尾瀬の高層湿原を読み解く

～忍び寄る危機

第7章 お花畑の秘密 ～高山植物という生き方

第8章 南尾瀬の森の歴史～人と自然のかかわり

第9章 まとめにかえて

～尾瀬の森の豊かさを自然再生に活かす

定価 1890 円(税込み)

著者 高田研一(森林再生支援センター)

監修 東京電力株式会社

出版 山と溪谷社

～最近の森林再生支援センターの活動～

「府民の森ひよし」に講師を派遣

「府民の森ひよし 森林倶楽部」主催の植生調査講習会が、2006年3月5日(土)と6月18日(日)に開催され、本センター専門委員ら2名が講師として参加しました。

ワークショップ「世界遺産をシカから守れ - 大峯山脈の自然再生に向けて -」を開催

2006年3月14日(火)に17年度地球環境基金助成金を受け、奈良県天川村にてワークショップと写真展「大峰の自然いま・むかし」を開催しました(本紙に報告掲載)。

18年度も引き続き地球環境基金助成金を受け、大峯山脈のシカ食害による植生変化に関する調査と啓発活動を計画しています。今年は継続で行う大峯山脈・前鬼だけではなく、大峯山脈・弥山周辺でも植生調査を行う予定です。

調査や大峯山脈の自然に興味があり、参加したいという方いらっしゃいましたら、是非、事務局までお問合せください。

「比叡山『ほうとうの森』大植樹祭」に質問状を提出

2006年5月27日(土)に開催されました「比叡山『ほうとうの森』大植樹祭」(毎日新聞創刊135年記念事業委員会主催)に植栽予定樹種等に関する情報公開を求める質問状を提出しました(本紙に経緯を掲載)。

「善気山で観察の森づくり」に講師派遣
京都 法然院の裏山(善気山)での森づくりの講師に本センター専門委員2名を派遣しました。この観察の森づくりは2003年度から続いており、間伐作業のアドバイスや植生調査を行っています。

～第8回定時総会について～

次回定時総会(第8回)を2006年7月30日(日)午後15時に京大会館にて開催いたします。

総会後には本センター活動報告として、3年間行いました尾瀬至仏山・戸倉山林調査の活動報告「尾瀬の自然保護を考える」を開催します。会員外の方の参加も可能です。皆さまお誘い合わせの上、ふるってご参加下さい(詳細は別紙の案内チラシ、または本センターホームページをご参照ください)。

センター活動へのお問い合わせ、ご意見・ご提案、センター入会申し込みは下記まで

特定非営利活動法人 森林再生支援センター事務局

〒603-8145 京都市北区小山堀池町 28-5

TEL/FAX 075-432-0026 E-mail: info@crnn.net

URL: http://www.crnn.net